

壺棺

野崎観音（福聚山慈眼寺）の本堂北側から大東の杜・飯盛ハイキング道に入り、石造九重層塔（第1話参照）を右手に見ながらさらに登っていくと展望休憩所があります。昭和33年（1958）の工事造成中にこの場所で発見されました。

壺は弥生時代後期（約2〜3世紀ごろ）に作られたもので、口径22・5センチ、高さ63・5センチのかなり大型のものです。口縁部には竹管文や波状文、またその端部には刻目を施すなど装飾性豊かで、体部にはヘラミガキ調整と呼ばれる手法が丁寧に施されています。

発見当時、壺は花こう岩の石を蓋にした状態で出土し、内部には複数の幼児の人骨があったと伝えられています。標高約78メートル非常に眺めのいい場所に埋葬されていることから、おそらくこの地域の有力者が、わが子を丁寧に埋葬したものだと思われます。

弥生時代の近畿地方では周辺を溝で区画した方形周

溝墓と呼ばれる墓があり、その区画内や溝には壺を使用した埋葬例が多くみられます。家族墓との性格から幼児を埋葬するために壺を使用することはかなり一般的な方法であったと思われます。

市域ではほかに中垣内遺跡で弥生時代中期（前2〜1世紀ごろ）の壺棺がありますが、この

時代の葬送観念を知る上で貴重な資料といえます。（生涯学習課）



歴史民俗資料館展示



竹管文・波状文